

今年は新型コロナの感染拡大により、教会行事だけでなく、公開ミサも中止になるという、歴史的にも特別な年となりました。一年の最大のお祝いである復活祭にさえ、集まることができないという考えられない事態に見舞われてしまいました。

公開ミサがなくなって、だれも来なくなった教会で、わたしは「教会とはなんだろう」ということを問いかけざるを得ませんでした。ミサの時間に間に合うように出かけていき、信者さんと会話し、役員さんと打ち合わせをし、終わったら帰る（あるいはお風呂に行く）、という繰り返しだけが教会生活だったのか、それらができなくなったいま、司祭の役割は何なのか、信者が集まれなくなったら教会でなくなるのか、といった問いかけでした。

しかし、集まれなくても共同体はあるはずで、来られなくてもそれぞれの家に信者はいらっしゃいます。感染が広がる中で不安に思うときこそつながる必要があるはずで、

実は、私自身も大きな不安を感じていました。感染しているかも、という不安、感染させてしまうかも、という不安、加齢に伴う体の不調もあって、つらい日々を過ごしました。

けれども、もっと不安に思っている人も、つらい思いをしている人も、と思い、これまで集会祭儀のために書いていた主日の説教を毎週送ることにしました。えらそうに励ましの言葉を書くこともありますが、実は自分自身に向けての言葉でもあるのです。

わたしたちは、いままで教会に来ている人だけに目を向けていたように思います。もちろん病人訪問や、敬老のお祝いの送付など、来られない人へのフォローもしてきましたが、今年は一時的に全員が「来られない人」になってしまったのです。みなさん、ぜひその「来られなかった」体験を生かして、集まれなくてもつながりを実感できる取り組みを考えてみてください。もちろん、そのときには、福音を必要としているのにつなぐことのできない、たくさんの隣人がおられることも忘れることはできません。これは、感染拡大という不幸な出来事を通してわたしたちに与えられたチャンスです。

感染の終息が見えない中で、「早くもとの日常に戻りたい」という切実な声を聞きます。安心して暮らせる日々を待ち望むのは当然ですが、教会はもとに戻ってしまっただけでは困ります。せっかく教会のあり方を考える機会が与えられたのですから、教会に来られない人も、福音を必要としている人も、感染している人も、していない人も、みんながキリストのもとにつなぐことのできる教会の姿を目指していかなければならないのです。それは福音を表す共同体の姿です。

ふたたび感染が広がりつつあるいま、みなさんも不安な日々を過ごしておられることと思います。しかし、わたしたちは、キリストの福音という最高の賜物をいただいているのですから、コロナの時代のいまこそ福音の希望を表す使命があるのです。